

Journal of the Gas Turbine Society of Japan

日本ガスタービン学会誌

Vol.46 No.1

Jan. 2018

特集 【わが国におけるガスタービン研究・開発の先駆者（その1）】
【第45回定期講演会（松山）報告】



公益社団法人 日本ガスタービン学会

<http://www.gtsj.org/>

ISSN 0387-4168

JOURNAL OF
THE GAS TURBINE SOCIETY OF JAPAN

特集：わが国におけるガスタービン研究・開発の先駆者

特集「わが国におけるガスタービン研究・開発の先駆者」に寄せて Preface to “Japanese Pioneers in Research and Development of Gas Turbine”



吉田 英生*¹
YOSHIDA Hideo

現代はインターネットで何でも情報が容易に入手できるように言われますが、実はそうではありません。確かに最近のことなら、たとえ個人がつぶやいたたわいないことでも一瞬で世界に拡散する一方で、インターネット普及以前の——大雑把に言えば昭和時代の記録はインターネット上にはほとんど存在しないといっても過言ではありません。たとえば昭和時代に学校教育を受けた現在50歳以上の方々は、ご自身の恩師の情報を探そうとしてもよほど著名な一部の方をのぞいては不可能でしょう。

わが国におけるガスタービン（以下GT）研究・開発の先駆者についても、その例外ではないと思います。GTの生みの親であるホイットルやオハインは今後も繰り返し語られ次世代に引き継がれていくものの、わが国の先駆者は？と問われると回答に窮する方が、本学会員といえども少なくないのではないのでしょうか。筆者自身、わが国のGT黎明期のことをほとんど知らないことを反省して勉強しようとしたのですが、限られた著作や学会誌のバックナンバーに断片的に記述がある程度ということに気付いたのが、今回の特集企画のきっかけとなりました。

とはいっても、GTの“先駆者”と呼ぶうる世代は、ご存命の場合はおおよそ120～100歳となり、ほとんどの方が鬼籍に入っておられます*²。また、それらの先駆者をよく知る方々も相当に限られかつ高齢でいらっやいます。このため、本特集を現時点で企画しても、どこまで新たな情報を集められるかという不安がありました。そのような不安はありつつも、今なんとか踏ん張ってやっておかないと、日本のGT史から黎明期のまとまった記録が永遠に消えてしまうのではないかという危機感が本特集関係者の背中を押しました。

申すまでもなく過去ではなく未来こそが大切ですが、その未来は過去からの膨大な積み上げの上に成り立っています。ニュートンの言葉（正確にはオリジナルはシャルトルのベルナルだそうです）“If I have seen

further it is by standing on the shoulders of Giants.”にあるように、想像を絶するような先人の苦労とその結果もたらされた恩恵や知見を十分に理解せずには、輝く未来もないと思います。また、単にGTに関する技術進展やその結果としてもたらされた国際的GTマーケットにおける存在感にとどまらず、後述するような極めて困難な時期にあってなお今日に続く有為の人材そのものを数多く育成された面でも、見識と信念に満ちた先駆者から学ぶ点は多々あると思います。

◆◆◆

GTの研究・開発が、わが国でも始まったのは第二次世界大戦中でしたが、1945（S20）年の敗戦により航空機生産・開発・実験が禁止され、それが1952（S27）年のサンフランシスコ講和条約により解禁されるまでの7年間、（航空）GT関係者は塗炭の苦しみを経験されました。その解禁の少し前、1949（S24）年11月と1950（S25）年4月に2回開催されたGTに関する座談会の記録（日本機械学会論文集、17巻、58号、1951年、全53ページ）を読むと、主だった関係者の方々80人以上が一堂に会し熱く議論しておられるただならぬ雰囲気は圧倒されます。

本特集で導入部をご執筆いただいた前間孝則氏の記事や、先駆者別に個々にご執筆いただいた記事からも、同様の雰囲気が十分にご理解いただけるものと思います*³。そして、国産初のネ20*⁴を作るとともに5ヵ国国際共同開発のV2500も軌道に乗せて“日本のジェットエンジンの生みの親／日本のジェットエンジン工業の育ての親”と呼ばれる永野治氏が、前間氏のインタビュー記事*⁵に関してわずかに希望を述べた「単に昔はこうであったとかいうのではなく、今後に生きてくるような客観性のあるまとめ方であってほしいね」という趣旨に、本特集がやはり沿っていることを願う次第です。

◆◆◆

最後に、分野は異なりますがやはりわが国の先駆者の一人として、半導体開発に大きな足跡を残した菊池誠氏（1925—2012）の「エレクトロニクスからの発想」（講談社ブルーバックス 1982年）から、本特集に関連して思い出される文章を引用させていただきます。

原稿受付 2017年11月30日

* 1 京都大学工学研究科航空宇宙工学専攻
〒615-8540 京都市西京区京都大学桂
E-mail: sakura@hideoyoshida.com

やがて、少しずつ文献がとどき始める。図書室に行つて、アメリカの学術雑誌をしらべると、
「……semiconductors……」

と、「半導体」の文字を目次の中に発見すると、カーッと血が頬に上るのが常であった。本当にうれしい。「これでまた、何か少しわかる」という期待から手がふるえたものである。

そのころ、もちろん、ゼロックスの複写機のようなものは無い。

わたしは文献を借りてきて、古めかしいタイプライターで、カーボン紙を七、八枚もはさんで、自分でコピーをうつのである。

今、わたしがタイプライターをうつと、多くの人がびっくりする。専門のタイピストほどにはいなくても、玄人のスピードでたたけるので、わたしにそんな特殊技能があったのかと思うらしい。そうではなくて、昔の苦勞の結果に過ぎないのだ。コピーを作る必要があった。

先輩や友達に配って、いっしょに勉強するのである。

何がうれしいとって、先輩と後輩が、新しい学問、新しい技術でいっしょに勉強して討論できるくらい、はげみになることはない。

おそらく、GTの先駆者の方々もこのような雰囲気の中で仕事をされたのだろうと想像する次第です。ホイットルがGTのコンセプトを提案した1928年から今年で90

年、見事な姿に成長した現在のGTですが、新しい技術展開は無限にあるはずで。本特集を、とりわけ次世代を築く若いみなさまに熱心に読んでいただき、今後に生かしていただけることを願っております。



謝辞とお願ひ

著者のみなさまには、ご多用中にもかかわらず貴重な記事をご執筆いただきましたこと、心よりお礼申し上げます。また、(株)IHIの柏木武氏と藤貫泰成氏をはじめとする先駆者ゆかりの企業・機関のたくさんの方々にも、情報提供などで多々お世話になりました結果、この特集を進めることができましたことを感謝申し上げます。

さらに、(株)J.G.コーポレーションの渡辺秀一郎氏と島野公男氏からは、同社創業者 故渡辺秀行氏編集の「1号ガスタービンの思い出集」(1989年)からの写真や文章の転載に際し、全面的なご協力をいただきました。心よりお礼申し上げます。また、生没年月日の手がかりさえ全くなかった近藤俊雄氏につきましては、(株)パイロットコーポレーションの辻豊氏と高橋利枝氏の調査により判明しましたことを付記して、お礼申し上げます。

最後に読者のみなさまへのお願いを申し上げます。もし、本特集に追加し得る／すべき貴重な情報をお持ちの場合、ご一報いただければ、ありがたく存じます。また、今後のために、忌憚ないコメントもいただけましたら幸いです。

* 2 先駆者として、どの方を取り上げるかということは議論のあるところだとは思いますが、ひとまず100年前の1918年以前にお生まれの以下のような方々を候補とさせていただきます。

土光 敏夫	1896 (M29)	年9月15日—1988 (S63)	年8月4日
中西 不二夫	1897 (M30)	年1月19日—1964 (S39)	年6月11日
沼知 福三郎	1898 (M31)	年5月4日—1982 (S57)	年9月14日
中田 金市	1900 (M33)	年7月25日—1998 (H10)	年4月12日
種子島 時休	1902 (M35)	年7月20日—1987 (S62)	年8月7日
近藤 俊雄	1902 (M35)	年10月6日—1996 (H8)	年3月6日
林 貞助	1904 (M37)	年9月30日—1999 (H11)	年10月29日
棚澤 泰	1906 (M39)	年10月23日—1992 (H4)	年7月27日
渡部 一郎	1908 (M41)	年4月13日—1996 (H8)	年1月4日
粟野 誠一	1910 (M43)	年12月10日—2007 (H19)	年9月4日
小泉 磐夫	1911 (M44)	年10月1日—1991 (H3)	年4月8日
永野 治	1911 (M44)	年10月9日—1998 (H10)	年2月22日
山内 正男	1912 (T1)	年11月5日—2010 (H22)	年11月4日
岡村 健二	1912 (T1)	年12月8日—1989 (H1)	年1月15日
井口 泉	1913 (T2)	年9月1日—2004 (H16)	年10月20日
円城寺 一	1914 (T3)	年1月1日—1995 (H7)	年1月11日
八田 桂三	1915 (T4)	年3月30日—1995 (H7)	年6月13日
入江 正彦	1915 (T4)	年10月30日—2003 (H15)	年12月24日
須之部 量寛	1915 (T4)	年12月10日—1995 (H7)	年11月17日
水町 長生	1916 (T5)	年7月31日—2006 (H18)	年12月15日
今井 兼一郎	1917 (T6)	年4月16日—	
岡崎 卓郎	1918 (T7)	年3月12日—1998 (H10)	年10月23日

* 3 先駆者個人別の記事(略伝)につきましては、まず編集委員会および関係機関で、先駆者ゆかりの方々を調査しました。幸いにも先駆者の警咳に接した方が見つかった場合は、委員がご自

宅にインタビューに伺ったケースを含めて、生き生きした情報を入力することができましたが、一方で何のツテもない場合も多数ありました。そのような場合は、既存の文献から厳選した情報を編集し、特集として一覧できることに大いなる価値があるということで、先駆者ご本人にゆかりのない筆者も複数担当させていただきました。

1月号に間に合わなかった方々は5月号以降にも引き続き掲載します。なお、現時点では執筆者あるいは文献情報を見つけるのが困難な方、さらにもし脚注*2の候補から漏れていることをご指摘いただいた場合、執筆可能でしたら随時追加させていただく予定です。

なお、本文中では先駆者や関係者につき「敬称なし」を基本としましたが、師弟関係から「先生」を外すことができない場合もあることをご理解願います。

* 4 太平洋戦争中に設計されたGT名称として、たとえば「ネ20」と「ネ-20」の二つの表記がありますが、前者のハイフンなしが海軍式、後者のハイフンありが陸軍式の呼び名であるようです。本特集では、その選択は各著者におまかせしました。また、読み方については、「ねのふたまる」と呼ばれることが多いようですが、NHK番組スポットライト「ジェットエンジン ネ-20」(1976年9月16日放送)では、生みの親である永野治氏と種子島時休氏が、それぞれ「ネ20」／「ネ10」のことを、「ねのにいます」／「ねのいちまる」と呼んでおられるので、2／1の数字を「ふた」／「ひと」と呼ぶと必ずしも定まっているわけではないようです。ただ「にじゅう」／「じゅう」とは呼ばないようです。

* 5 前問孝則、日本の名機をつくったサムライたち——零戦、紫電改からホンダジェットまで——、(2013)、p. 368、さくら舎。

特集「わが国におけるガスタービン研究・開発の先駆者」(その2)

“Japanese Pioneers in Research and Development of Gas Turbine” (Part 2)

吉田 英生*1

YOSHIDA Hideo

本年1月号に引き続き標記特集(その2)をお届けします。今回は全員が学界関係の先駆者——筆者にはつい「大先生」と口に出てしまう方々です。

1月号発行後あるいはそれ以前の準備中に、「貴重な特集、ただしもう20年早く企画してほしかった」といったお声を複数いただきました。確かに20年前なら、今回の特集で取り上げた方々のご存命の場合102～80歳で、部下や弟子の方々も多数いらっしゃったので、大きく異なる内容になっていたと思います。ともあれ、こうして平成が終わる1年前に、明治～大正～昭和～平成の3～4時代を生き抜かれた先駆者の記録をとどめることができたことに、あらためて感謝申し上げる次第です。

(その1)で序論を執筆いただいた前問孝則氏の『日本の名機をつくったサムライたち(さくら舎2013)』のまえがきに次のような文章があります:

「確かに、彼らの多くは八〇代後半から九〇代の長寿であった。エネルギーな活躍ぶりは、その強靱な肉体にも裏打ちされていたのであろう。」

そこで以下のように棒グラフにしてみましたところ、まさにそのとおりだと実感した次第です。

最後に、1月号16ページの1号ガスタービン関係者記念撮影でお名前が判明している方々は以下のとおりです。

③池田英正, ④山内正男, ⑥須之部量寛, ⑦不破廣行, ⑬佐藤義, ⑭飯田平八郎, ⑳藤本康, ㉒重見孝, ㉔根矢清, ㉗三輪光砂, ㉘梶山泰男, ㉙比気正(以上敬称略)

また、1月号17ページ脚注で文章を引用しました近藤敏雄氏の写真を(株)パイロットコーポレーションでお探しいただきましたので、ご紹介させていただきます。



近藤 俊雄 1902 (M35) 年10月6日-1996 (H8) 年3月6日

原稿受付 2018年3月29日

*1 京都大学工学研究科航空宇宙工学専攻
〒615-8540 京都市西京区京都大学桂
E-mail: sakura@hideoyoshida.com

